

ARCADE

岡崎市美術館 ニュース〈アルカディア〉
OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

94

SPRING
2023





企画展『矢作川—川と人の歴史』展示のシーボルトコレクション矢作橋模型（中央が筆者）

今年三月で美術博物館での私の学芸員活動が終了する。三河武士のやかた家康館時代を含めれば四十二年間、岡崎市で学芸員として活動してきた。市に奉職した翌年の昭和五十七年十一月、三河武士のやかた家康館を開館させ、はからずもその翌年は滝田栄主演のNHK大河ドラマ徳川家康の放映により観光客が急増、家康ブームの渦中のなかにあった。そして、今度のNHK大河ドラマでの家康ブーム。家康に始まり、家康で終わるのも、家康との因縁を感じる。

学芸員人生のなかで、励んできたことに地域資料の収集、調査、研究がある。地方の博物館学芸員にとって、地域資料に向き合うことは当然のことではあるが。

地域資料から、岡崎の地域史、さらには三河の地域史へと目を向けることになったきっかけは、平成十一年、美術博物館において開催した企画展「矢作川—川と人の歴史」である。矢作川の舟運・洪水・歴史を取り上げたものであるが、なかでも舟運を通じての人と人の繋がりに焦点をあてたものであった。河川の物流を通じて上流域の足助と下流の平坂、その間に位置する岡崎の人々に交流があり、その繋がりにより足助や岡崎の商人たちが矢作川河口の新田開発に資本を投ずることは驚きであり、伝えたかったことである。

この企画展により、矢作川を通じての人と人の交流に興味をもち、矢作川の舟運が近世岡崎

の発展に大きく寄与していると考えられるようになった。持論であるが、近世岡崎繁栄の要因は、①政治の拠点である岡崎藩と城、②東西交通・流通の東海道宿場、③南北物流の動脈である矢作川、この三つの存在にあると考える。この考えに今でも揺るぎはない。ここに到達した背景には、矢作川展以前から関わるようになった愛知県史編さんでの調査の経験がある。

愛知県史で調査員として三河各地に赴き感じたことは、近世岡崎の情報発信力の高さである。西三河南北への情報伝達は岡崎の飛脚問屋を通じて行われる。矢作川流域の物流における岡崎の商人の介在や、俳人鶴田卓池の資料が各地で見られことなど、岡崎に関わる資料に出会うたびに、西三河の政治・経済・文化の中心地岡崎、との思いを強くした。広域的に地域資料をみることで掴んだ実感である。この近世岡崎がもつ活力の高さを少しでも美術博物館の企画展などで紹介しようというのが活動の原点にあった。

学芸員活動で力を入れてきたことに岡崎城絵図の収集がある。三河武士のやかた家康館時代を含めて購入・寄附などにより集めた絵図は一〇点を越える。多くの絵図を集め、比較することで城郭の編年化が可能となり、文献資料では把握できない城郭と城下町の推移の一端を明らかにすることができた。絵図のなかには類似の絵図がいくつもあり、同じような絵図は買わなくてもいいのではないかと言われたが、相違点



大分市中根宅での調査風景（平成10年10月）

が一所でもあれば、購入に踏み切った。その相違点が大事なのである。前後を推定、編年化が可能になる。集まった絵図は、美術博物館などの展示のほか、教育委員会による岡崎城の発掘、岡崎城基本整備計画策定などに活用されており、うれしく思う。

岡崎城絵図とともに岡崎藩の藩政資料収集にも時間を割いてきた。藩家老中根家の子孫である中根忠之さん宅に大量の資料が残されていることが平成九年に判明、岡崎市で調査することになった。同年から十三年まで六回、毎年のように九州大分市の中根宅に赴き調査を行った。調査には新行紀一先生にも御同行いただいたほか、美術博物館職員の多くが参加、写真撮影を行った。度々の調査に、お相手いただいた中根さん、昼食も用意いただくなど、ここでの体験は生涯忘れることはできないであろう。調査の成果は、平成十四年と十八年に刊行した岡崎市史料叢書『中根家文書』上・下、二巻に結実している。さらに、平成十九年にはこの刊行を記念して、中根忠容の岡崎藩財政改革をテーマとした企画展「隼人がゆく」を開催した。開会式に中根さん夫妻をお迎えできたのは大きな喜びであった。人と人の繋がりが学芸員の力となりその活動を支えているのである。

昭和六十二年から平成三年までの四十年間をかけて三河の秋葉山常夜燈を調査したことがある。三河全域で八〇〇点近い常夜灯の存在を確認し、『三河地域史研究』や『岡崎市史研究』に紹介したことがある。秋葉山常夜燈は火伏の秋葉信仰により建立されるもので、人が行き交う町・村の中心地、道路三叉路、寺の門前などに建立されるという特徴がある。岡崎市で仕事

を始めた頃、岐阜市出身の私にとって町と村のなかに立つ常夜燈は奇異に映った。美濃にはない景観であったことが興味を引いた。調査をすることで、「村中安全」「町内安全」などと刻まれた常夜燈には、鎮守として「秋葉山」の神を祀る近世の人々の思いが込められていると感じるようになった。この調査の経験は、平成二十九年の美術博物館の企画展「三河の秋葉信仰 火伏の神の系譜」の開催に活かされた。同展の開催にあたり写真撮影で、三十年ぶりに常夜燈の現地を訪れると、場所を移動したり、処分されているものがあることを知った。三河でも最大規模となる碧南市志貴町妙福寺前の秋葉山常夜燈が消えているのには驚愕した。道路わきに立つ秋葉山常夜燈は、道路拡幅、開発により、少なからず移動させられる運命にある。

秋葉山常夜燈には岡崎石工の作者銘を刻むものがある。銘のある常夜燈は、特注品で、大規模で、均整のとれた姿を呈するものが多く、岡崎石工の技術の高さをうかがうことができる。石都岡崎と呼ばれるように岡崎市は石工業が近世以来盛んで、燈籠のほか、鳥居、石仏、墓石、石碑など多くの石造物が残されている。しかし、これらの石造物は、秋葉山常夜燈の例のように失われつつある。墓誌銘には岡崎藩の藩儒が関わった情報豊かなものがあるが、これも墓じまいなどで存続の危機にある。岡崎の石造物の調査と保存は緊急の課題である。

地域資料、地域史の究明・探求は時間のかかる地道な作業である。しかし、おもしろく尽きることがない。地域資料に真摯に取り組むことは、将来の美術博物館、さらには岡崎市発展の礎につながるものと確信している。

大河ドラマ どうする家康

EXHIBITION

NHK大河ドラマ特別展

どうする家康

山下 葵

会期 令和5年7月1日(土)～8月20日(土)

徳川家康はなるべくして天下人になったのではない。いかにして戦国乱世を駆け抜け、その後二六〇年続く泰平の世の礎を築いたのか。様々な危機に直面して、時には失敗し、時には運も味方につけながら、予測のつかない戦国に立ち向かった家康、その生涯を描きます。

さらに、織田信長・武田信玄・徳川四天王など、家康に多くの影響を与えた人物に関係する品々も交えながら、家康が生きた戦国乱世の世界に迫ります。全国各地より厳選を重ねた優品をとおして、家康がその人生で直面した「どうする？」を紐解いていきます。

今回は、本展覧会で出品する多くの品々の中から二点ご紹介いたします。

数々の武者のもと、戦国を見届けた刀【写真①】

備前長船の刀工である長光の作である太刀で、^ク大般若の異名で知られています。室町時代、本作が六百貫文という破格の値段が付けられたことから、六百巻から成る大般若経にちなんで名付けられたそうです。その値段も領けるような優美な刃紋、豪壮な姿で、備前長船鍛冶の基礎を築いた



写真① 国宝 太刀 銘 長光(号 大般若長光) 東京国立博物館
Image : TNM Image Archives

長光の代表作として名高い一口です。

もとは室町幕府第十三代将軍足利義輝の佩刀でした。が、義輝より重臣の三好長慶に下賜され、その後、織田信長の手に渡りました。

元亀元年(一五七〇)、浅井・朝倉連合軍を信長が破った姉川の合戦に家康は参戦します。そのときのお礼として、家康は信長からこの太刀を譲り受けました。そしてその後、長篠合戦において、長篠城を武田勝頼軍の包囲から守り抜いた奥平信昌へと、その功績を讃えて家康から贈られました。

時の有力者の手元で愛され、そして贈答品としての役割を果たした優美な太刀を、じっくりとご覧ください。

戦国を生きた公家の情報力がスゴすぎ！【写真②】

戦国時代の公家で、近衛前久の存在をみなさまはご存知でしょうか。二〇二〇年の大河ドラマ「麒麟がくる」のなかではその活躍が描かれ、「前様」の愛称で話題になりました。前久は

関白・左大臣を務めた公家でありながら戦国の武將たちと積極的にかかわりをもった人物で、家康が従五位下三河守に叙任される際には朝廷への働きかけを行っており、家康とも交流がありました。

今回紹介するのは、前久が息子信伊に宛てた、関ヶ原の戦いから五日後の慶長五年(一六〇〇)九月二十日の書状です。このなかには、関ヶ原の戦いの三日後(九月十八日)の夕方、とある人物が前久のもとを訪ねて語った、関ヶ原の戦い当日の進軍状況だけでなく、その前後の様子まで記されています。

従来の説では、石田三成軍と家康軍が一進一退の攻防を繰り返して、長時間の戦いの末に勝敗が決したと考えられていました。しかし、この前久の書状には家康の軍勢が即時に攻撃して大勝利を収めたとあります。

さらに、家康は毛利輝元家臣の吉川広家に対して、毛利輝元の知行分を確約することを条件に、家康に味方するように交渉をしてい



写真② 近衛前久書状 近衛信伊宛 慶長五年九月二十日 京都・陽明文庫

この夏、美博に行く？
どうする？

たということが書かれています。当時家康は毛利陣営の切り崩しに躍起になっており、破格の条件提示で吉川広家を味方につけようとしていたのです。戦い直前のギリギリまでの交渉があったということとをリアルに伝えてくれる内容です。

スマホもネットもない時代に、たったの三日でここまでの情報収集をしていたとは驚きです。まだまだ興味深い「関ヶ原情報」が満載ですが、それは展覧会でお楽しみ。研究の最前線でも注目されている前久の情報力を、ぜひその目でお確かめください。

歴史ファンの方、当館の常連さまはもちろん、大河ドラマを見て歴史に興味を持った方、歴史はそんなに得意ではないけど、大河ドラマの盛りあがりや少し気になっている方。そんなすべての皆様楽しんでいただける展覧会になっております。そして、皆様に足を運んでいただけるきっかけになるような、様々なイベントをご用意しております。

ぜひ、大河ドラマ「どうする家康」の世界をドラマとは違った角度からご体感ください。

EVENT INFORMATION

講演会

①家康と忠勝

講師：平野明夫氏(國學院大學講師)
日時：7月8日(土) 午後2時～4時
* 3時30分～村岡幹生氏によるコメント

②天文16年の竹千代をめぐる織田・今川

講師：村岡幹生氏(中京大学名誉教授)
日時：7月9日(日) 午後2時～4時
* 3時30分～平野明夫氏によるコメント

③元亀・天正争乱と徳川家康

講師：平山優氏(歴史学者・大河ドラマ時代考証)
日時：7月23日(日) 午後2時～3時30分

④家康の「国家」戦略

講師：柴裕之氏(東洋大学非常勤講師・大河ドラマ時代考証)
日時：8月11日(金・祝) 午後2時～3時30分

講演会共通

会場：当館1階セミナールーム(予定)

開場：午後1時30分

定員：70名

料金：無料

スペシャルギャラリートーク

本展企画委員による、刀剣「だけ」の説明会！

講師：高橋哲也氏(静岡市美術館学芸員)
日時：7月30日(日) 午後2時～3時
会場：当館展示室
定員：20名
料金：無料(ただし当日の観覧チケットが必要です)

ギャラリートーク

展覧会担当者が見どころを解説！

講師：当館学芸員
日時：7月17日(月・祝)、7月29日(土)、
8月6日(日)、8月17日(木)
各午後2時～3時
会場：当館展示室
定員：20名
料金：無料(ただし当日の観覧チケットが必要です)

ワークショップ

心とからだを整える アロマセラピー

天然精油で手のひらサイズのアロマ作り
講師：aromanomori 森恵美氏
日時：7月15日(土) 午後2時30分～4時30分
会場：館内レストラン YOUR TABLE
定員：20名(小学校3年生以下は保護者同伴)
料金：2,000円(ワンドリンク+ケーキ付)

ジブンだけの花押、ホシくない？

花押を知り、自分だけの花押を作れます！
講師：当館学芸員
日時：8月13日(日) 午後2時～3時30分
会場：当館1階セミナールーム
定員：20名
料金：無料

申込方法—イベントすべて共通

- ◇あいち電子申請(ネット申込)は当館HPから
- ◇はがきでの申込
ハガキ裏面に希望のイベント名(講演会は番号も)、参加者の郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記のうえ、お申込みください。*参加者1名につき1応募(はがきまたは電子申請)のみ。
*1枚のはがきで複数のイベントの申込ができます(応募多数の場合は抽選)。

申込締切 6月8日(木) 必着

申込先 〒444-0002 岡崎市高隆寺町峠1 岡崎市美術博物館 「どうする家康」イベント係

連載

本多家の家臣団 2 へ本多忠勝の家臣団②

5

湯谷 翔悟



画像2 「略系覚記」(国立公文書館蔵)
松下元綱の仕官について記す。このとき元綱は16歳

〈承前〉永禄九年(一五六六) 附属ではないと考えられるもう一人の人物は、松下河内守元綱である。松下家については、「略系覚記」(国立公文書館蔵)という、由緒を記した記録からたどることができる。この「略系覚記」は、享保一三年(一七二八)頃成立とみられ、『寛政譜』より半世紀以上早い。さらにこの松下家は、本多家四代政勝の頃に本多家を離れている。つまり「略系覚記」は、本多家やその家臣の家譜との調整やすり合わせがなされていないと考えられ、資料的価値は高いといえる。

この「略系覚記」によると、松下元綱は天正元年(一五七三)に一六歳で家康に仕えたたとある。これを逆算すると、松下元綱は永禄元年(一五五八)生まれになる。永禄九年附属とすると九歳。さすがに若すぎる、いや幼いと言った方が正しいだろう。

なお、「寛政譜」にも松下元綱の名が見えるが、「略系覚記」と来歴が異なる。『寛政譜』で元綱の生年は記されていないが、安綱(常慶)の弟に位

置づけられている。安綱は寛永元年(一六二四)に六七歳で死去したとあるので、安綱の生年は永禄元年で元綱と同じになってしまう。さらに安綱と元綱の間には女子四人・男子一人がいるので、『寛政譜』において元綱の生年は永禄元年以降となることは間違いない。『寛政譜』と「略系覚記」のいずれが正しいか(もしくは両方とも間違っているか)ははっきりしないが、永禄元年より遡らないことは一致している。さすれば、松下元綱の永禄九年附属は事実ではないと考えてよからう。

さらに『寛政譜』には、松下家の他にも永禄九年附属とは異なる来歴を記す家がある。桜井庄之助勝成は、「天正十八年東照宮の仰せによりて本多忠勝に属し」と、天正一八年(一五九〇) 附属、渡辺半兵衛真綱は、永禄一二年(一五六九) 附属と記している。松下・桜井そして渡辺に共通しているのは、近世期に本多家から離れていることである。とすれば、どうも『寛政譜』に永禄九年附属という記述がなされるにあたって、本多家を離れた家の来歴は参照されていないようである。つまり、家康から附けられた者のうち、『寛政譜』編さん時点でよく分からない家は、「とりあえず永禄九年附属」ということにされた可能性がある。

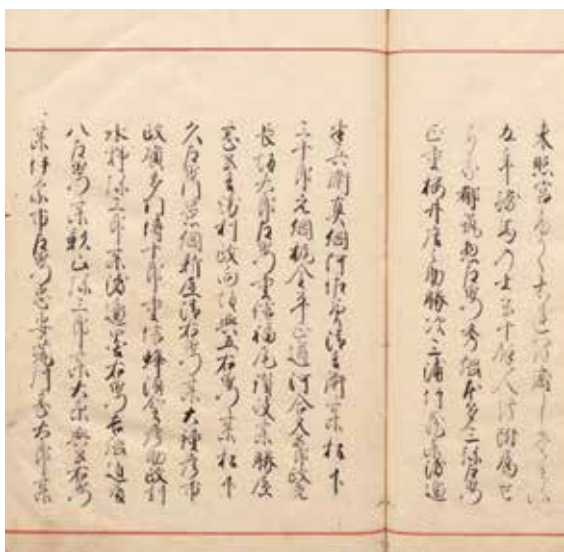
そこで『寛政譜』編さん時点で本多家を離れていた家を、『岡崎市史』第二巻の記録で確認してみよう。旗本へ帰参、本多の別家に附属、断絶などにより、一五人が離れていることを記す。『岡崎市史』に記された五三人のうち約三・五人に一人が、「とりあえず永禄九年附属」とされた可能性があることになる。

また『寛政譜』に記された五〇余騎と、一九世紀成立の『岡崎藩本多家分限帳』(愛知県図書館蔵、以下、『分限帳』)を比較すると、その数はさらに増

加する。名前の記された五二人のうち、『分限帳』で確認できるのは、二三人のみと半分を切る。もつともこれは名字が一致する者も「確認できる」としているのだから、実際にはもう少し少ないかもしれない。さらに言えば、永禄九年附属の五〇余騎は、記録によって人数も構成員もバラつきがある。『分限帳』の時点で確認できる家も、実は後世に追加された可能性さえあることになる。

このように、本多家家臣団というより、おそらくほぼすべての家康家臣の家臣団については、このような近世期の不確実な記録の中から、少しでも「確からしい」記述を選別して考えていく必要がある。

〈続〉



画像1 『寛政譜』第681(国立公文書館蔵)
附属の50余騎が書き連ねられる



愛知県指定文化財 聖徳太子立像（南無仏太子像）
鎌倉時代 満性寺蔵



岡崎市指定文化財 親鸞聖人像
室町時代 願照寺蔵

今年二〇二三年は浄土真宗を開いた親鸞聖人（一一七三—一二六二）の生誕八五〇年にあたります。親鸞は京都に生まれ、九歳で出家して比叡山で修行しますが、二九歳で山を下り、法然上人の弟子となります。そこで一心に念仏を唱えることによりすべての人が往生できるという阿弥陀如来の本願念仏の教えに出あいますが、教団は弾圧を受け、師の法然は四国へ、親鸞は越後に流罪となりました。後に罪が赦された親鸞は、関東などで二十年にわたる布教に励みました。京都に戻った親鸞はさらに研鑽を積み、主著『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）をはじめ多くの著作を晩年まで執筆して、弘長二年（一二六二）九十年の生涯を閉じました。その教えは今も多くの人々に受け継がれています。

岡崎市を中心とする西三河は古くから浄土真宗が盛んな地域です。岡崎市内約三五〇寺のうち、浄土真宗の寺院が約四割弱を占めています。その始まりは建長八年（康元元年＝一二五六）親鸞の高弟である真仏、顕智、専信らによる矢作の薬師寺での念仏勧進とその後三河に滞在した顕智による教化とされています（『三河念仏相承日記』）。浄土真宗の本尊は阿弥陀如来であり、真宗寺院では阿弥陀仏の名号、絵像、木像などが礼拝されていますが、聖徳太子を祀る寺も数多くあります。

聖徳太子は、推古天皇の摂政として『十七条憲法』など新しい政治を推進し、また遣隋使を派遣して当時の先進的な学問であった仏教を取り入れ、その普及に努めました。この

ため太子は「和国の教主（日本の釈迦）」とも称され、宗派をこえて「日本仏法の祖」として崇敬されています。さらに親鸞が聖徳太子の建立と伝わる京都の六角堂で、太子の本地とされる救世観音の夢告を受けて法然のもとに赴き、これが真宗の端緒となったことから、真宗には篤い太子信仰があります。親鸞は聖徳太子を深く敬い、太子像を祀り、その徳を称える「皇太子聖徳奉贊」などの多くの和讃を著しました。門弟たちも太子を礼拝し、初期真宗の本尊とされた「光明本尊」にも「和国の教主」として聖徳太子が描かれており、また真宗では手に柄香炉と笏（しやく）を持ち、「真俗二諦像」と称される太子十六歳の孝養像などが流布しました。

近隣の満性寺（岡崎市）の「聖徳太子立像」（南無仏太子像）や本證寺（安城市）の「聖徳太子絵伝」をはじめ、三河の真宗寺院には鎌倉時代に遡る聖徳太子像や太子絵伝などが伝わっており、古くから太子信仰が盛んであったことがわかります。このほか三河の特色ある真宗文化として、善光寺如来、聖徳太子、法然上人、親鸞聖人の四絵伝があり、これらは日本への仏教伝来から聖徳太子による仏教の興隆、法然、親鸞に至る真宗の歴史を图示したもので、その内容を解説する絵解きなどを通して、布教に大きな役割を果たしました。混迷する現代、人々の救済に力を尽くした親鸞聖人と聖徳太子の生涯に、思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

展覧会ラインナップ 2023

2023	4	5	6	7	8	9	10	11	12	2024	1	2	3
	休館 4月～6月			NHK大河ドラマ特別展 どうする家康			至高の紫 典雅の紅 王朝の色に挑む		138 億光年 宇宙の旅		レアリスムの視線 —戦後具象美術と抽象美術		

- 改修工事復旧と開館準備のため休館
- NHK 大河ドラマ特別展「どうする家康」
- 至高の紫 典雅の紅 王朝の色に挑む
- 138 億光年 宇宙の旅
- レアリスムの視線 - 戦後具象美術と抽象美術

4月～6月
7/1 (土)～8/20 (日)
9/16 (土)～11/5 (日)
11/19 (日)～2024/1/8 (月・祝)
2024/1/27 (土)～3/17 (日)

シャカリキに開館準備中！
どうするじゃない、やるんだよ。
家康の次は光る君が待ってる
神秘的な宇宙の世界へ
自分の目で見比べてみよう！

SHOP INFORMATION



山梨県市川大門の和紙メーカー大直と、デザイナー深澤直人氏とのタッグにより誕生した SIWA/ 紙和 (シワ)。
軽くて風合いのある和紙の良さをそのままに、和紙漉きの製法で作った新しい和紙「ナオロン」を開発し、現代の暮らしにあった新しい和紙製品を生み出しています。手にしたときの軽くて柔らかな肌触りと、温かみを感じる SIWA のアイテム。和紙のしなやかさを持ちながら、耐久性があり、水に濡れても破れない特徴を持っています。使い込むほどに味わいも増し、手に馴染んでいきます。一つ一つ丁寧に作られた生活に必要な身の回りの道具。名刺入れやペンケース、ティッシュケースなど新生活にいかがでしょうか。MUSEUMSHOP YAGURA は休館中のため、安城市住吉町にある姉妹店インテリアショップ soup.にてお買い求め頂けます。休館中のお問合せは soup. (0566-95-5288) までお気軽にお問合せください。

営業時間 休館中のためCLOSED
H P <https://www.b-soup.com>

YOUR TABLE



岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。
※3月16日より再開

営業時間 11:00～21:30 土日祝 10:00～21:30
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
T E A 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:30 (L.O.20:30)
T E L 0564-28-0141
H P <https://your-table.owst.jp>

表紙画像：重要文化財 白檀塗具足(静岡・久能山東照宮博物館)



設備改修工事のため、岡崎市美術館は令和5年6月まで休館します

H P <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>



【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第94号 2023年3月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)